

## 第 72 回 歴史リレー講座「筒井順慶と明智光秀」 天野 忠幸氏 (R2.9.20)

先日、第 2 部として再開された NHK 大河ドラマ「麒麟が来る」では松永久秀の宿敵、筒井順慶がいよいよ登場し、大和の市井の様子も描かれています。大和武士の代表であり、現役の興福寺の官符衆徒でもあった順慶は、明智光秀や織田信長とともに、どのように戦乱の時代を生き抜いたのでしょうか。

室町時代から戦国時代の和歌山盆地は、北部を支配し北朝派の筒井氏（和歌山県和歌山市）と、南部を支配し後南朝派の越智氏（高取町）が勢力を二分していました。その因縁は、応仁の乱（1467～78）以前にまで遡ります。事の発端は、河内と紀伊を支配する幕府管領の畠山家の後継者争いでした。河内の勢力との連携を目論む筒井氏は、畠山政長の筆頭家老だった河内守護代遊佐氏より妻を迎えるなど、有効関係を結びます。一方、越智氏は戦に強い畠山義就との関わりを深めました。

筒井順慶は天文 18 年（1549）に生まれます。しかし、翌年に父順昭は天然痘を患い 28 歳で他界しました。残された 2 歳の順慶は、畿内の覇者となった三好長慶や、宇陀地方の沢氏らの力を得て、なんとか難局を乗り切りました。ところが、弘治 3 年（1557）に興福寺と手を組む家臣の福住宗職と、河内との連携を重視する叔父の筒井順政の間で内紛が勃発します。身の危険を感じた順慶は、河内の安見宗房を頼んで出奔しました。そして、宗房の援軍を得て、筒井城主に復帰し、宗職を出家に追い込みました。

これで筒井家も安泰と思いきや、永禄 2 年（1559）に安見宗房と対立する三好長慶に敵視されてしまい、その家臣の松永久秀に筒井城を追われます。安見方として目をつけられた筒井氏にすれば、「もらい事故」のようなものです。永禄 6 年（1563）、興福寺が筒井氏を見限り、久秀を官務（官符衆徒の棟梁）と認定したことで、代々筒井氏が継承してきた権力基盤を横取りされた格好の順慶にとって、久秀はまさに不倶戴天の仇と化しました。

永禄 8 年（1565）、三好長慶の甥義継は將軍足利義輝を討ち取った一方、家臣団の分裂を招き、大和では久秀連合軍（足利義昭、織田信長）VS 順慶連合軍（足利義栄、三好三人衆）の構図となりました。翌年、順慶は久秀から筒井城を奪還します。ところが、永禄 11 年に義昭幕府が成立し、久秀は娘を信長の息子に嫁がせました。義昭や信長は順慶の降伏を拒否し、順慶は再び城を失うこととなります。

元亀元年（1570）、久秀が三好三人衆と結び、義昭の下を去ったことで、順慶に起死回生のチャンスが到来しました。義昭は久秀に対抗するため、順慶に養女を嫁がせ、順慶は翌年に筒井城を再び奪還しました。天正元年（1573）、義昭は久秀や武田信玄と手を結び、信長との戦いに臨みます。大和国内では筒井方優勢と見られるも、松永方の支援者も多数という状況でした。7 月、義昭が信長に敗北すると、順慶は信長と手を結んで多聞山城を包囲し、年末には久秀を降伏させました。順慶は岐阜の信長に年頭の挨拶に訪れ、ここに主従関係を確かなものにします。

天正 3 年（1575）、順慶は信長の娘（妹？）と祝言を挙げ、翌年には大和国主の座を手に入れます。そして天正 5 年（1577）、謀反を起こして信貴山城に立て籠る久秀を光秀らと共に攻め落とし、両者の長い戦いに、ついに終止符が打たれました。

この頃の信長は休みなく戦争を行うための体制作りを急ぎ、畿内近国を一族で固めようとしていました。順慶には大和一国の検地と筒井城も含めた城郭の取り壊しを命じ、改めて郡山城へ入ることを指示します。これには、武士たちの反乱防止、国主といえども臣下に過ぎない順慶への牽制という意味もありました。さらに、寺社や武士の不満を抑えるため、光秀が大軍を率いて大和に入ります。順慶は光秀の力も得て、この困難な仕事を成し遂げました。順慶にとって光秀は頼もしい寄親（上司）でしたが、与力（部下）である順慶の仕事ぶりを厳しくチェックしたのも光秀でした。

そして、いよいよ天正 10 年（1582）6 月 2 日、順慶は光秀が信長を襲撃した本能寺の変の知らせを受けます。信長亡きあとの大和は大混乱に陥ります。当初は光秀と組んで、大坂城にいた織田信長の三男信孝を攻撃する予

定だった順慶ですが、羽柴秀吉の動きを知ると一転して見送ります。光秀は洞ヶ峠に陣取り、順慶に圧力をかけますが、順慶はこれを拒絶しました。そして、大和が光秀・信孝・秀吉の草刈り場となることを避けるため、大和武士を郡山城に集め、血判起請文を書かせ一致団結して行動することを決め、信孝や秀吉に味方することを決断しました。順慶のおかげで、信孝と秀吉は全力で光秀にあたることができ、6月13日の山崎の戦いで光秀は敗死しました。そして、9月26日には山崎城で秀吉と対面します。その後、順慶は秀吉と主従関係を結んでいきました。

結局のところ、順慶にとって、光秀は頼もしい存在であると同時に、煩わしい上司でもありました。その光秀亡きあと、順慶が大和武士たちを一つにまとめ上げるには、新たな後見人として、秀吉が必要だったわけです。一方で、秀吉も神国とも言われた大和武士を統率する人物として、順慶を欲していたのです。